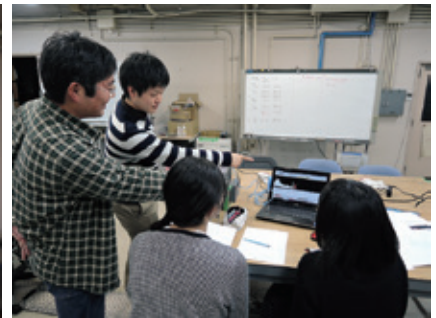
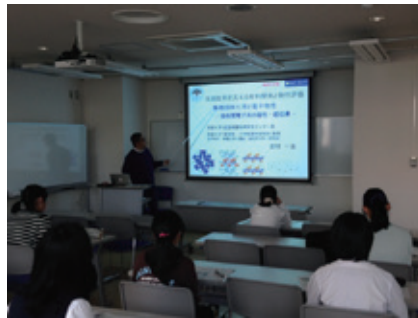


女子中高生のための関西科学塾 JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム

女子中高生のための関西科学塾は、科学技術振興機構（JST）の「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」の一環として、関西の大学が提携し、女子中高生を対象に講演会や実験などを行う企画です。第 10 回目となる今回は、神戸大学が中心となり、神戸大学、大阪大学、大阪府立大学、奈良女子大学、京都大学などで開催されました。

京都大学では、11 月 15 日（日）に高校生 79 名、同伴者 9 名の参加のもと、様々な実験講座が開催されました。



■京都大学での実験一覧

	テ ー マ	部 局	講 師
1	目にみえない放射線を測る	理学研究科	川畑貴裕
2	DNA・タンパク質 1 分子を実際に見てみよう！	物質－細胞統合システム拠点	原田慶恵
3	DNA とはなにか ― DNA に関する基礎実験	理学研究科	朴昭映
4	カオス・フラクタルの世界を知る	情報学研究科	宮崎修次
5	にじいろを見よう	理学研究科	馬場正昭
6	地下を“掘らず”に探ってみよう！	工学研究科	後藤忠徳
7	高温超伝導の不思議	理学研究科	吉村一良
8	畑の土を調べる	農学研究科	間藤徹・落合久美子
9	あれっ！こんなところにも核が？!! ～ DNA に起こった異常を観察しよう～	理学研究科	秋山（張）秋梅

待機乳児保育室 保護者懇談会

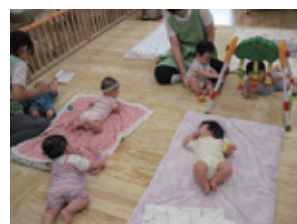


11月25日（水）12時～13時に、「保育園入園待機乳児のための保育室」の利用者を対象に、保護者懇談会を行いました。

育児・介護支援事業WG主査 小西先生の司会進行で、昼食を食べながら、保育室で撮影した写真のスライドを流し、保育士さんにお子さんの保育室での様子をお話してもらいました。その後、保育士さんが子どもたちに人気の「きらきらぼし」「大きな太鼓、小さな太鼓」



「パンダ、ウサギ、コアラ」の3つの手遊びを紹介し、保護者の方と一緒にやってみました。その後、質疑応答の時間には、離乳食についての質問に、保護者の方がそれぞれよく作るものや工夫していることなどをお話され、外国人研究者より、海外と日本の食事や文化の違いなどについて話が及ぶと、皆さん興味深く聞き入っておられました。終了後も、育児について周りの方とお話され、短い時間でしたが、保護者同士の交流を深めました。



会議室で気分転換

「保育園入園待機乳児のための保育室」では、9週目～15ヶ月までのお子さんが一緒に生活しています。生活リズムもそれぞれなので、ときには、すやすや眠るお子さんの横で、元気いっぱい遊びまわったり、大きな声で泣き出してしまったりすることがあります。そんなときには、会議室へ行き気分転換。会議室はマットをひき、トンネルの遊具を置いて、保育室として利用できるようにしています。いつもと違うお部屋を興味深く眺める子、ハイハイでトンネルをくぐって行ったり来たりする子、自由に歩きまわる子、みんなのびのびと遊んでいます。



京大病院 オープンホスピタル

10月31日（土）、京都大学医学部附属病院でオープンホスピタル（病院見学会）が開催され、病児保育室「こもも」がポスター参加しました。

**京都大学男女共同参画推進センター
病児保育室 こもも**

I. 病児保育室とは
「京都大学男女共同参画推進センター病児保育室」は、京都大学医学部附属病院、京都大学理学部、京都大学工学部、京都大学農学部、京都大学経済学部、京都大学法学部、京都大学文学部、京都大学教育学部、京都大学国際文化学部、京都大学環境学部の各学部・研究科・センター等に所属する学生・教職員・関係者の子どもが、病児保育室で安心して過ごすことができるよう、病児保育室の運営を行っています。

II. 病児保育室の利用方法について
病児保育室は、病児が365日いつでも利用できる施設です。また、病児保育室では、病児の健康状態を確認し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。また、病児保育室では、病児の健康状態を確認し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。

III. 病児保育室の利用方法について
病児保育室は、病児が365日いつでも利用できる施設です。また、病児保育室では、病児の健康状態を確認し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。また、病児保育室では、病児の健康状態を確認し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。

IV. 病児保育室について

- 病児の病状の状況に合わせて病児・保護者・医師・看護師・薬剤師・病児保育士が連携して、病児の病状を把握し、安心して過ごすことができるよう配慮しています。
- スタッフが病児の病状を把握し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。
- 病児保育室では、病児の健康状態を確認し、必要に応じて医師の診察を受けることができます。

こももハウス
みんなが好きな
みんなのこももちゃん

水の電車
こももちゃん
みんなが好きな
みんなのこももちゃん

こももちゃん
みんなが好きな
みんなのこももちゃん

エネルギー科学研究科 男女共同参画推進講演会

12月11日（金）、エネルギー科学研究科主催、男女共同参画推進センター共催にて、男女共同参画推進講演会が開催されました。

石原慶一副研究科長の司会進行で、稲葉カヨ理事・副学長より挨拶があり、世界における日本の現状や、京都大学の現状、京都大学男女共同参画推進センターの取り組みなどについて説明がありました。

次に、豊橋技術科学大学男女共同参画推進室長、京都大学客員教授の中野裕美先生に、「ダイバーシティ社会に向けて～工学系でどう取り組むか、考えてみませんか？～」と題し、講演をしていただきました。女性が活

躍すると何が期待できるのか、なぜ女性研究者、女性リーダーが少ないのか、女性が活躍するにはどうしたらいいかなど、ご自身の体験を交えてわかりやすくお話していただきました。最後には、京都大学の工学系がリーダーシップを取り、他大学を牽引してほしいと期待のお言葉を頂きました。

質疑応答の時間には、参加者それぞれの視点から、質問や意見があり、中野先生が丁寧に回答されました。

最後に、塩路昌宏研究科長の挨拶で、講演会を締めくくりました。



連載：研究者になる！－第53回－

「Sample ID: kyoko151204」

工学研究科・助教 名村 今日子

私はまだ研究者としての経歴は短く、家庭を持っているわけでもありません。それでも、私が生きてきた人生を他の誰も生きてはいないので、参考にならなくとも一例にはなれると思い、この記事を書かせていただくことにしました。

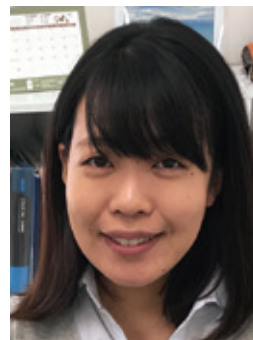
研究者として

本当に研究だけに限って言えば、女性であることが支障になったことはありません。結婚や出産などプライベートとの兼ね合いは別です。他の方も書かれているように、研究成果は論文や発表の件数などいい意味で数値化されており男女平等に評価されます。とはいえなぜあえて研究者なのでしょう。

私が研究者になろうと思ったのは小学生のころです。将来の夢に「研究者」と書きました。早々に決めた理由は、小さい頃から父母や親戚が数々の自然科学系の実験を一緒にやってくれたことだと思います。昆虫採集から草木染め、顕微鏡観察や電子工作など挙げだすときりがありません。一番のポイントは、いつも私をほったらかして周りが楽しんでいたことです。その様子を見ながら一緒にやってみると、本当に楽しい（気がしてくる）のです。そして部屋に戻ると本棚には図鑑や写真集など様々な本がそと本棚に並べてありました。自然と興味がわき、ページを何度もめくりました。こうしてうまく自然科学系の実技と座学を自発的にやるように洗脳されていきました。幼少期をあえて書いたのは、この時の経験が今も私の中で生きていると思うからです。

そのまま研究者になることについて何の疑いもなく、大学に入りました。今もずっとお世話になっている研究室の門を叩いたきっかけは、廊下にかけてあった鈴木基史先生のポスターです。そこにはカラフルな薄膜の写真とその薄膜の電子顕微鏡像——目には見えない面白い形の構造を撮影した写真がいくつも並んでいました。直感で「ここで研究がしたい」と思いました。さすがに研究室に入ってから、結果が長らくでなかったり論文がなかなか通らなかったり、苦しい時期もありました。それでも続けている理由は、幼少期と同じように研究の楽しさを人と共有した瞬間があるからです。詳しくは書きま

せんが、私は熱を使って流体を駆動する実験を行っております。なかなか駆動されない流体を相手に試行錯誤を繰り返していた中で、ある日突然急激なマイクロ回転流が発生しました。うれしいのか何なのかふわふわした気分のまま、現象の再現性を確かめて鈴木先生に報告しました。結果をみなり「これはめちゃめちゃ面白い！」と言ってとても喜んでくださいました。その瞬間に楽しさの実感が湧きました。あの感覚は今でも研究の励みになっています。簡単な科学実験ならともかく、大学の研究ともなれば時間と手間がかかる分、楽しさを見失いがちです。先生にいただいたように、自分も研究の楽しい瞬間を捉え、なるべく学生を巻き込んでその感覚を共有できるようにしたいと思っています。



女性として

ここまでで私が研究を楽しんでいることは伝わったと思います。それでは女性であることが全くこれまで気にならなかったか。答えは否です。絶望的な男女比（女性3%程度）に気づいたのは大学入学後でした。大学院進学以降はほとんどいつでも女性は自分一人という環境でした。女友達とずっと一緒に居たい方ではないですが、周りの学生との性別・年の差が少しずつ広がる中で、たまに孤独を感じることがありました。

そんな時にちょうど「JSPS 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「工学研究科馬詰研究奨励賞」の受賞によって海外行きの切符を手に入れました。合計3ヶ月間、スウェーデンのウプサラ大学のGranqvist先生の研究室に滞在させていただきました。そこには10名以上の博士課程の学生がおり、その内半分くらいが女性でした。同じ分野にいる女性研究者仲間がたくさんできたことで、女性研究者として生きることが特別なことではない、という気楽さが生まれました。この経験のおかげで今日も楽しく研究に打ちこめています。

以上、私の今までというものを書き連ねました。結局のところ、今、私はただの研究者です。いつか女性研究者として生きる日が来たら、もう少しみなさんの役に立つことをどこかで書きたいと思っています。

Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>